最優秀賞(山口県知事賞) 特定非営利活動法人 もりのこえん

代表者 井出崎 小百合 (子育て分野/山口市)

活動の動機

東日本大震災をきっかけに、大量に生産して大量に消費して、それが豊かだという価値観。それ を次の世代に伝えていくことが大人の役割なのか、ということに疑問に持ち、子どもたちがこれか らの新しい未来を生き抜ける力をつけていける保育がしたいと、もりのこえんを起ち上げた。

活動の目的

子どもとその育ちに関わる全ての人に対して自然体験活動を主とした子育て支援に関する事業

を行い、子育てを支え合い、誰もが尊重 され生きる喜びを感じられる社会を目指 すことを目的とする。

活動の内容

保育事業を中心に、全ての世代に対する自然体験活動を実施。

自然環境を守り持続可能な社会を実現 することを目指し活動。

子どもたちが自分で気づき考え行動で



きるよう見守り、自然の中で過ごすことで自然を大切にする心やふるまいを学びながら、自然の中で存分に子ども時代を楽しめるよう過ごしている。また地域の皆さんと共に地域の自然環境美化や保全活動を行っている。

- ① 子どもの自然体験事業「森のようちえんもりのこえん」「土曜学校 天花の森舎」「子どもサバイバル12months」
- ② 家族の自然体験事業「0歳からのアウトドア」「暮らしの森舎」
- ③ 自然体験の知識を学ぶ事業「自然体験活動入門講座」
- ④ 昨年度からは、上天花町になくてはならないもりの こえんになる!を合言葉に地域交流を事業化。また、

2021年12月よりフリースクールも開講。子どもたちが自分で気づき行動できる場を提供する。



経済価値がないといわれる山村で、新しく '森'を次世代育成、教育の場として活用するという森のようちえんのあり方は、過疎化に悩む'田舎'に光を当てるものではないかと思っている。子どもたちが森に入ることで、森の風景が変わり、保護者やスタッフが森林整備を行う等、森や自然と良い関係ができつつある。自然の中で過ごすことで、子どもたちは持続可能な社会の実現に必要な考えが自然と身に付いていく。また、拠点である地域の耕作放棄地や人口減、高齢化等、地域の課題解決に寄与できるような仕組みづくりを行っていきたい。加工品を作ったり食事の提供ができるようにし、地域の雇用を生み、保護者や地域の人が自由に交流できるスペースづくりなど夢は広がる。

優秀賞(朝日新聞社賞) NPO 法人 青い鳥動物愛護会

代表者 清水 久仁子(地域づくり分野/防府市)

活動の目的

人間の都合で劣悪な環境に置かれていたり、殺処分される犬猫を目の当たりにして、貴い命を1 匹でも救いたいと思った。保健所で殺処分寸前の犬猫を保護し譲渡につなげ、家庭へ送り出すこと により、犬猫だけでなく人も幸せになることを目的としている。

活動の内容

- ○防府市の保健所から、期限日に残っているすべて の大猫を引き取り、譲渡につなげる。これまでに 約2800匹を受け入れ、2400匹以上を譲渡につな げてきた。年間約370匹を受け入れ310匹を譲渡 している。
- ○犬のシェルターは防府市佐波川沿いに設け、現在 100 頭の犬がいる。ボランティアとスタッフによって毎日の体調管理、餌やり、散歩を行う。人なれしていない野良犬はリードをつけての散歩が難しいため、併設のドッグランで運動する。リードをつけて散歩ができるように少しずつ訓練をして、リードをつけられると譲渡対象となる。
- ○猫のシェルターは、個人所有の3軒の家を活用。現在 180 匹の猫がいる。子猫や人になれている猫、野良猫、 病気の猫など様々。犬と同様、猫担当のボランティア スタッフが毎日の体調管理、投薬、えさやり、掃除な ど猫に声をかけながら作業している。
- ○生まれたての犬猫はミルクボランティア宅に委託し、 生後2~3か月程度になるまで育成し譲渡につなげる。 人なれしていない犬猫はシェルターで受け入れ、ボラ ンティアとスタッフで愛情をかけながら世話をし、心 を開いてくれるよう日々努力している。
- ○犬の譲渡会を月に1回、猫の譲渡会を毎週日曜日に道の駅等で開催する一方、SNSでも広く呼び掛ける。健康チェック、しつけをし、譲渡後も連絡を取り合いながら一生サポートしていく。



定期的に開催される譲渡会



猫部屋で一緒に遊ぶスタッフ

これからめざしたいこと

善意の寄付金やえさなど支援物資もたくさんいただく。しかし、ワクチン接種代や薬代、えさ代など支出は、はるかに収入を上回っている。お金があれば、防府市以外の地域の犬猫たちも助けられるのだがとは思うが、今はこの現状で精いっぱい。2016年2月より防府市保健所に収容された犬猫の殺処分ゼロを継続し、ひいては山口県の殺処分ゼロをめざしている。物言わぬ、弱い命を救うために今後も活動していきたい。

優秀賞(y a b 山口朝日放送賞) 特定非営利活動法人 チャイルドハウスひなたぼっこ

代表者 原田 幸子(福祉分野/光市)

活動の動機・目的

障がい児の放課後等デイサービスと日中一時支援が中心だが、立ち上げ当初から不登校児支援を入れ込み、障がいのあるなしにかかわらず受け入れをしている。障がいというのは病院の診断が下り、何らかの病名がついて初めて障がい児となるが、診断のない(心のケアが必要な)不登校児童のお子さんも支援が必要と感じた。1年・2年と事業を行う中で、不登校の問題は避けて通れぬ問題と強く認識するようになった。不登校を克服した保護者や当事者からの聞き取りで、学校に行くべきなのに行けない、その焦る思いと戦う中で救いになったのが情報と安心の場があるということだったそうだ。他市では行政の管轄のフリースクールや適応指導教室などが、安心の場ではあるが、光市にはそんな場所がないことから不登校児童支援ぽっかぽかを立ち上げた。

活動の内容

○不登校支援サービス「ぽっかぽか」

不登校や行き渋りの子どもたちに、学校や社会への 復帰・自立に向けてのサポートをする。生活意欲や学 習意欲を高めるため個々の趣味・関心に応じて幅広い 活動を用意している。

- ・クッキング 献立を考え、買い物、昼食づくり、食事、片付け まで、自分たちで頑張ってみよう
- ・創作活動 季節に応じた物づくり、花壇の名札づくり、集中力を 高めるための工作、ぬりえ等
- ・奉仕活動 当事業所・自治会周りの清掃、お年寄りの相手、未就 園児の相手等・園芸活動、冬野菜作り、花の苗植え等 ・魚釣りにチャレンジ

これからめざしたいこと

何らかの理由により学校に行けず、苦しんでいる子どもたちがいる。いじめのみならず、家庭環境、親子関係、友達関係、先生との関係、学習困難、本人の特性…理由は様々。その子どもたちも環境さえ整えば、学習することもいろいろな体験をすることもできると考える。ただ、在籍している学校では、それが難しいこともある。今、現在、



アイロンビーズに夢中♡



「大漁だぁ」

光市では、不登校児童は学校以外の場所がない。学校もしくは自宅かの選択肢しかない。個人に寄り添い、段階を踏んで支えてくれる環境が必要。他市にはフリースクールや適応指導教室や不登校支援センターなど親子が安心できる居場所がある。光市にもぜひそんな居場所を作りたい。そして一人でも多くの子どもたちが社会復帰をし、自信をもって人生を楽しめるように支えていきたい。

優秀賞(山口新聞社賞) 異世代交流子育てサロン asis

代表者 岡﨑 麻衣(くらしづくり分野/周南市)

活動の目的

asis (アズイズ)とは、「ありのまま、そのまま、飾らない」無理をしないで柔軟にという意味がある。その言葉通り、誰もが自分らしく自然体で居られる居場所づくりを目指している。そして困りごとをお互いに助け合える地域になるように、「鹿野を大家族にしよう!!」と企んでいる。

活動の内容

① 地域食堂「鹿野ふらっと食堂」

誰もがふらっと来て、みんながフラットにできる場所。食材はフードバンク等を利用し、地元企業からの支援や助成金、寄付を活用している。300~450食を提供。同時に、訪れた人たちに向けてフードパントリーも開催。

② フードパントリー

上記とは別に、「ふる里マルシェかの」の店先で、 買い物に訪れた人たちに保存食を配布。「足が悪く て買い物に出られないお隣さんに持っていってあげ よう」等のやり取りをして、近所・知り合いで助け 合うきっかけをつくり、つながりづくりの一助となる。



年に2~3回程度、地域の民生委員と協力し、雪や病気でお店へ行けない、店まで遠い、車の運転をしていない、忙しくて余裕がないなどの困りごとを抱えた、ひとり親家庭・介護世帯・90歳以上の高齢世帯へ保存食等を届ける。

④ あったカフェ

鹿野に住む女子をつなぎ、楽しく笑顔になれる時間を提供す しるお茶会。ママ友同士、子育てや家事を忘れて、お茶を飲みながら、自分らしさを取り戻すための時間を楽しむ。

⑤ かくれがマルシェ in 鹿野

2021.7より月に1回、鹿野地域にあるお店(パンや、農家レストラン、カフェ、花や、靴屋等)と他地域からハンドメイド等のお店が参加し、鹿野に多くの人を呼び込もうと開催。合言葉の「かくれが」で、各店舗の限定商品が手に入る。「鹿野にはこんな素敵なお店があるんだよ」と「巡り型」のマルシェで、鹿野の良さをアピールする場を地域住民と一緒に作り上げている。

これからめざしたいこと

結婚を機に鹿野に移り住んで、「鹿野は水も空気も空もきれい。夜空も星も蛍も雪も最高。なんて魅力的」と感じた。もともと、鹿野に住んでいる人たちにとっては当たり前のことだったが、改めて鹿野の魅力に気づき、たくさんの人に訪れてもらい、知ってもらい、好きになってもらいたいと感じている。私たちは、おせっかいなおばちゃんになって鹿野地域をどんどん発信していきたい。



フードパントリー



鹿野ふらっと食堂開催(^^♪

コープやまぐち奨励賞

セレーノ四つ葉 (肢体不自由児・者/親と仲間の集う会)

代表者 江本 真弓(福祉分野/宇部市)

活動の動機

肢体不自由児やその他の障害がある子どもの育児は健常児の育児と非常に異なり、地域社会との交流も少なく不安やストレス、孤立感を感じやすい。また進級進学、将来的には親亡き後の子どもたちの生活など悩みが多い。保護者が1人で抱えがちな不安や悩みを共有し解消する場所、また多世代の保護者との繋がりを継続する事で、誰かが誰かの指針となれる場所つくりが必要と思い会を立ち上げた。セレーノとはイタリア語で「晴れた」「晴れ晴れとした」…の意味。ここに集う誰もが心が穏やかに晴れわたってゆくようにと名付け活動している。

活動の内容

定例会では会員の困りごとや、やりたい事などを聞き取り、勉強会 や研修会、施設見学、啓発活動などを行う。

- ① 地域連携推進:災害時に取り残されることのない安全な避難についての学習及び居住地域への連携提案・地域における共生社会への学習と提案などを行う。サポーターを募り交流し地域社会への参加が行えるようにする。また依頼があった講演活動やボランティア活動も実施している。
- ② バギー型車いす認知度アッププロジェクト ベビーカーと間違われやすい「バギー型車いす」が公共交通機関はじめ様々な場所で「車いす」 として適正な福祉的配慮を受けることができるよう周知活動を行い、誰もが外出しやすい社会の一助につなげる。
- ③ きょうだい児の育成・ネットワーク作りプロジェクト どうしても障害のある子どもに比重が偏りがちであるが、その兄 弟たちが抱える悩みや特性などを学びきょうだい児の健やかな 育児につなげる。またきょうだい児が悩みや困りごとを保護者で なく、同じ立場の者同士で相談しあえるネットワークの構築を目 指す。
- ④ 着物で成人のお祝いをしようプロジェクト 障害があるため、地域の成人式に出ることが難しくあきらめてい るご家族が多い事を受け、車いすの子どものための着物作成や着

付けについて学び、セレーノで式典を企画中。現在は式典当日へむけて採寸、着物修正、着付けなど実施中。晴れ着を着た子どもとご家族の晴れの門出を沢山の笑顔で祝福したい。

これからめざしたいこと

我が子に障害があるとわかった時に受け止めて前に進む為には分かり合える家族や仲間、地域社会の理解や支えがとても重要。セレーノ四つ葉では今後も障害のある子どもと家族、また周りに集う人々が充実した日々を送る為に、保護者の不安や悩みを解消する定例会や SNS での交流を実施し、よりよい将来にむけて前を向いて歩ける友情を増やしながら繋がる事で孤立することのない居場所つくりを目指す。そして誰もが思いやりと笑顔に溢れた共生社会に向けての一助となる活動を続けたい。

コープやまぐち奨励賞 周南市安田の糸あやつり人形芝居保存会

代表者 片川 久美子(地域づくり分野/周南市)

由来

正式に文書は残っていないが、安田の糸あやつり人形芝居は、江戸時代末期に四国、阿波徳島の 藍染商人、松尾何某が安田の市で、商いの傍ら人形を手作りして村人に浄瑠璃を教え伝えたのが起 源とされている。戦後、昭和21年に保存会が結成され、昭和51年には、5本の糸で操る人形芝居 が山口県無形民俗文化財に指定された。活動歴は、75年。

活動の目的

- ・周南市安田地区に江戸時代から伝わる「周南市安田の糸あやつり人形芝居」の保存と継承活動の一環として、この伝統芸能を地域の子どもたちに伝承すること。
- ・子どもたちの郷土への関心と豊かな人間性を育て ること。
- ・子どもたちが生き生きと活動する姿を見せることで、地域の交流・活性化を図ること。



合同練習風景

活動の内容

① 公演活動

平常時であれば、年に 10 回前後の公 演活動を行っているが令和 2 年よりコ ロナ禍の影響で、予定していた公演 は、何度も中止せざるを得なかった。

② 継承活動

1) 三丘小人形浄瑠璃の会 5~6 年生を対象に、週に1回総合学 習の時間を使って、「人形遣い」「浄瑠 璃語り」「三味線」の技を伝承。



2021年「三丘っ子フェスタ」で披露

2) 放課後子ども教室

4~6 年生を対象に、月に1回開催。過去に自分たちが作った人形をもとに「糸あやつり人形」 「発声」「三味線」「振付」「効果音」「脚本」等をオリジナルの芝居にして全校朝会で発表。

③ 他団体との公演交流

2019年、「出雲あやつり人形」が70年ぶりに復活をした。2016年より、当団体が人形を貸与し、技術指導を継続支援し、2019年8月の共同公演では、互いの絆と伝統継承を誓い合った。

これからめざしたいこと

熊毛三丘に、移住してきた家族もいるので、地域の人にも人形浄瑠璃の魅力を改めて知ってもらいたい。小学生も大人になって、三丘を離れる人もいるかもしれないが、またふるさとの素晴らしさとともに浄瑠璃のもとに戻ってきてほしいと伝えていきたい。保存会の灯を絶やさず、新たな展開を生み出せるよう、会員一同これからも力を合わせていきたい。

コープやまぐち奨励賞 アレルギーっ子の会ぽれぽれ

代表者 田辺 理恵(子育て分野/山口市)

活動の目的

食物アレルギーへの理解を深めること

子どもの食物アレルギーに悩む母親同士の情報交換や話の出来る場所づくり

活動の内容

食物アレルギーの子どもを持つ母親が主体のおしゃべり会は、アレルギーに関する情報交換や、日ごろ抱えている悩みなどを、みんなで話すことで気持ちを共有し、少しでも気持ちが軽く前向きになる場所となっている。

① アレルギー対応調理実習

年に1~2回参加者のアレルゲンに対応した調理実習を行う。災害時でも簡単にできるポリ袋クッキングを子どもたちも一緒に挑戦。日頃は、同じものを皆で食べることができないので工夫して皆が食べられる食材を使う。おいしく食べることはもちろん、自分と同じように頑張る子がいるんだと励みになり、他の子に配慮することも学ぶ。

② アレルギーっ子の防災

アレルギーがあると大きな災害にあったとき、避難 所で配給されるものはアレルゲンが使われていて 食べられないものである可能性が高く、炊き出しの 材料に何を使っているのかわからなければ口にする ことができない。まずは自助としてアレルゲンに合 った備蓄をすること、周りの人に知っておいてもら



「みんなで作った豚丼を食べるよ」



アレルギー表示、工夫しました

うことなどを当事者に啓発。また、アレルギーはわがままではない、命にかかわることであることを理解してもらい、助けてもらうことができるよう呼び掛ける。2021年、他団体との共催で「アレルギーっ子のための避難所支援を考える」イベントを3回シリーズにわたって開催。アレルギーっ子当事者、家族、給食調理員、婦人会、医師、行政など、様々な立場の人がかかわる中で、アレルギーを知り、配慮できる実践につながった。

これからめざしたいこと

これまで同様、お母さんたちの悩みを少しでも軽くできるようおしゃべり会を継続していく。子どもたち自身のアレルギーに対する知識を高め、自分で自分の身を守る力をつけることができるような企画を考えていきたい。

防災に関しても、今年度行ったイベントを活かして、より広く、いろいろな立場の方にアレルギーについて理解してもらうことができるような活動をしていきたい。

コープやまぐち奨励賞・学生の部

山口県立大学看護栄養学部栄養学科

食育系課外活動お弁当の日プロジェクト

代表者 栗林 夏子(地域づくり分野/山口県立大学)

活動の動機・目的

県立大学の「お弁当の日プロジェクト」は、13年前、若者の食の乱れを憂いた栄養学科の学生有志により、2008年4月に始まった。まず自分たちの若者の食意識を高めることが、自分自身の一生涯を通じた健康を支え、また次世代の子どもたちの食をよりよくしていくことにつながることから、大学生を中心とした若者を対象に、食意識の向上と食生活の改善を目指す食育活動の実践を目的としている。

活動の内容

① お弁当の日の開催

目的: 食の自立に向けての支援として、大学生が台所に立つ機会を設ける。

内容:月に2回、テーマに沿ったおかずやご飯を1人1品タッパー1 つ分持ち寄り、それを囲んでおしゃべりしながら食べる。テーマは「おもてなし」「ジブリ」「令和」「ワールド」など様々。

② 2010年「お弁当の日プロジェクト」を発足

目的:食にかかわるイベントを企画・運営することを通して、学生 はじめ地域の人たち(高校生・大学生・一般の方々)に食の 大切さを伝え、さらに食と命について考える機会を持つこと。

内容:地元の食生活改善推進委員と一緒に料理教室、山口県酪農乳業協会とのコラボ企画、過去には、山口県ならではの食文化が学べる企画、県産品をふんだんに取り入れたメニューの料理教室等を企画・実施。

コロナ禍での活動

定期的に開催されていた「お弁当の日」が中止になる中、前年度に食生活推進改善委員と一緒に行った料理教室「一切合切常備菜~お弁当にも入れなさい~」のレシピ集と動画制作に取り組んだ。完成したレシピ集と動画は食生活改善推進協議会へ提案し、それぞれの料理教室で活用してもらえるよう配布。また、さらに 2021 年度は山口市の若者の食生活における問題点の改善に取り組んだレシピ集と動画の作成にも取り組んでいる。

これからめざしたいこと

食に関するワークショップや活動を通して、地域社会への理解を 深め、食を通して地域社会への貢献を積極的に行っていきたい。料 理教室など参加者に楽しんでもらえる企画を実施することで、自分



お弁当の日「いただきます」



食生活推進改善委員さんと一緒に



レシピ集ができました

たちの成長につながることを伝えていきたい。コロナ収束の折には、「お弁当の日」を復活させ、他の学 部の学生にもかかわってもらい、料理を作る楽しさ、一緒に食べる楽しさを実感してもらいたい。

コープやまぐち組合員賞 錦町林業振興会女性部会

代表者 藤井 明子(地域づくり分野/岩国市)

活動の動機・目的

山口県が農山村の女性を対象に、「女性も森林を育てる一因として、林業にかかわろう」との目 的で、林業技術を習得する教室「婦人教室」を昭和54年に開催。この時の受講生によってグルー プが結成された。山林内の植林、下刈り、枝打ち等をする中で、山林内の雑草の有効利用を考え、 つるかご編み、草木染めを始める。林業女性の自立をめざす。

活動経緯と内容

昭和59年:婦人林業教室を経て、錦町婦人林業

研究会として発足

昭和63年:つる細工の制作、販売に着手

草刈りや枝打ちなどをする中で、作

業途中に邪魔となる「蔓」を加工し

細工物として販売を始める。

平成6年:草木染めの制作、販売に着手

草木染めを行うことで森林に人が入

り、きちんと手入れが行われる。

平成10年:「草木染め工房なないろ」を構える

平成16年:やまぐち森の恵みネットワークを設立、ネット販売

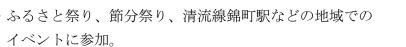
平成18年:やまぐち農山漁村女性起業ネットワークに加入

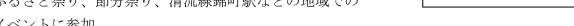
「草木染め」がやまぐち農山漁村女性起業統一

ブランドに認定される。

○地域とのつながり

- ・ピュアラインにしきで第3日曜日に出張販売、にしき産 品ステーションに販売委託。草木染のハンカチ、スカー フ、帽子、のれん、ストールなどを販売。
- ・老人会やJA婦人部などの各種団体、都市部修学旅行生 の受け入れ、地元小学生の体験交流多数。
- ・ふるさと祭り、節分祭り、清流線錦町駅などの地域での







世界に一つだけの僕らのハンカチ

なないろ工房で体験交流

・岩国地区林業女性部会(美和町、錦町)合同による料理教室、木工製品づくり等。

これからめざしたいこと

毎月の例会を通して、会員同士の親睦と情報交換を行っている。草木染めはやればやるほど奥が 深い。たくさんの人に工房を訪れてもらい草木染めの魅力を感じてもらって、世界に一つだけのオ リジナル作品を手に入れてほしい。草木染めとともに、錦町の素晴らしさも知ってもらい、地域活 性化の一助になればと思っている。

コープやまぐち組合員賞 おはなしクレヨン

代表者 齋藤 郁子(子育て分野/山口市)

活動の動機

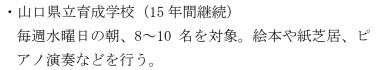
2000年に子ども読書年が制定され、山口市立大内小学校より、「地域の先生を」との要請を受け、 定期的に読み聞かせに入ることになった。

活動の目的

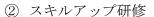
- 子どもたちが本に興味を持つきっかけになること
- ・創造力豊かな子どもたちが人生を生き抜く力を身に着けること

活動の内容

- ① 以下の3か所で読み聞かせ等を開催、継続
- ・山口市立大内小学校(21年間継続) 毎週金曜日の朝、11学級、約300名を対象。低学年は毎週・中学年は隔週・高学年は学期に1~2回。絵本や紙芝居、ペープサートなどを実演。



 おさばファミリークリニック通所リハビリテーション ひばり園(15年間継続)
月に4回午前中、14~15名対象。童謡、絵本、紙芝居、 手遊び、体操などを行う。



年に1回程度、アナウンサーの方や図書館の司書に依頼して、 選書の仕方や本の持ち方、めくり方、読み方等の指導を受け る。新しく入ってこられたメンバーには、長くかかわってい るベテランメンバーから伝え学んでもらう。

活動に寄せる思い

主となる大内小学校での読み聞かせ活動は、授業前の貴重な時

間。21 年間続けてこられたのは、会員だけの力でなく、学校の先生方の熱い思いが活動を支えてくださったことは言うまでもない。このコロナ禍にあっても「読み聞かせは心の教育」と捉えてくださっている先生がたに感謝している。今の子どもたちは、ゲームやバーチャルの世界に身を置いているからこそ、肉声を届けることの意味は大きい。いつの日か、読んでもらった本やお話が、子どもたちが生きていくための心の支えになると信じている。また、高齢者の方に絵本を読む必要性は時を追うごとに実感している。昔のこと(故郷・父母・家族・友)を思い出すことで脳を刺激し笑顔が増えていく。読み手の私たちも笑顔になり、教えられることも多く楽しいものである。

これからめざしたいこと

「それぞれのライフサイクルに合わせ、できる時に、できる範囲で、楽しく」をモットーに、無理なくこの活動と思いが、いつまでも継承され、多くの子どもたちが本に親しんでくれることを願う。



熱心に聞く子どもたち





コープやまぐち組合員賞 錦ホープの会

代表者 濵本 万砂惠(福祉分野/岩国市)

活動の動機

山口県には全国組織の患者会である「全国パーキンソン病友の会山口県支部」があり、会合などで顔を合わせることはあったが、ゆっくり話すこともなく、地元岩国では一度も集まることがなかった。近場で同じパーキンソン病患者同士が気軽に集まり交流できる場所を作りたいと思ったのが設立のきっかけ。

活動の内容

- ① 錦ホープの会交流会開催(毎月第4日曜日)
- ・第1回目の交流会以降、定期的に集まりたい という要望が多数寄せられ、3~4か月に1度 が2か月ごとになり、今では毎月1回の開催 となっている。
- ・患者当事者と介護者が参加。近況報告や情報 交換の「座談会」、機能改善訓練、音楽療法、 ヨガ療法などの「リハビリ」、闘病生活のスト



久しぶりの交流会

レス発散と、発声のためのリハビリを兼ねた「カラオケ」、その他季節に合わせた行事等、会員 のやってみたいことを中心に開催している。

- ・交流会開催の前には、企画運営のために「錦ホープの会ネット」を開催して準備を行う。交流会の案内状の作成と発送、買い出し等の当日準備、会報の発行など有志で行う。
- ② 国会請願

年に一度パーキンソン病患者への難病対策の推進にかかる請願のための署名活動や募金活動を 行う。

③ パーキンソン病講演・相談会 岩国病院の神経内科のドクターの声掛けで 始まり、年に1回病院と会の共催で行われ る。毎年恒例で過去7回開催されているが、 周南市や柳井市からも参加がある。

これからめざしたいこと

治療法のない難病患者は社会や周囲から支援を受けなければ生きていくことはできない。 パーキンソン病患者にとっても同様で、病気が



スマホ学習会の後、講師も一緒に

進行することはあっても治ることはない。様々な症状に翻弄され、薬との折り合いをつけながら日々格闘している。見ただけではわかりにくい症状も多々あり、病気での困りごとや症状が理解されないことも多い。精神的にも孤立してしまいがちの患者や介護者の会が、その場しのぎのコミュニティではなく、また支援を受けるばかりの立場としてではなく、地域や社会に何かを発信し、貢献できる存在になりたい。情報を届ける形として、口コミに頼っているが、SNSにも取り組み、多くの人とつながっていきたい。